

新冠百話

第二十七話

「武四郎の見たサケノンクル」(要約文)

松浦武四郎は幕末における北海道の探検家であり、北海道の名付け親として知られる人物である。武四郎は北海道の内陸部にある山や川を調査し、今日のアイヌ語地名調査の基礎を築いたことでも有名である。調査をする傍ら、アイヌコタンを訪れて詳細な聞き取りを残している。その中で、新冠に住んでいた「サケノンクル」というアイヌ民族がよく登場する。今回はその一部を紹介したい。

サケノンクルが記される書物は以下のとおりとなる。

○安政二年(一八五五)『ニイカップ御場所会所並蔵々建員数書』

○安政三年(一八五六)『武四郎廻浦日誌』

○安政四年(一八五七)『近世蝦夷人物誌』

○安政五年(一八五八)『東西蝦夷山川地理取調日誌』毘保久誌

これら書物に記されたサケノンクルの人となり要約すると、「安政四年、サケノンクルは六十七才。頭髮は白く、背の高さ約一八五センチで凛としている。サケノンクルは和名にすれば酒飲みと訳され、十、二十日も酒を飲み続け、酒を飲んだ時は普段の十倍の力を持ち、大木や大石で力比べしたらこの村で一番であった。食べる時は太鼓腹になる

ほどよく食べる。新冠の村々をとりまとめる村長職をしており、現在の大富地区(アネサル)に約十メートル四方の家に住み、妻、息子、息子の嫁の四人で暮らしていた。山猟を好み、常に弓矢を持ち、気質は豪快であった。若い時に間宮林蔵の道案内をして墨一丁をもらい、大切にしている。」

サケノンクルは、新冠場所(または会所：江戸時代に判官館裏にあった交易拠点)において和人にも尊敬されていたと思われ、幕府の役人である間宮林蔵を案内していることから、土地にも詳しくた人物と考えられる。間宮林蔵は、武四郎のように探検家であるとともに、伊能忠敬の弟子として西蝦夷の地図作成に貢献したことで有名である。

自然豊かな中で生きたサケノンクルにとって、松浦武四郎や間宮林蔵との出会いは忘れられない出来事であったことだろう。百五十年以上前の幕末に、こんな勇敢で頼もしい人物がいたことは、郷土の誇る一人に数えていいだろうと思う。



安政2年(1855)頃の新冠のアイヌ集落略図

～救急車の適正利用のお願い！～ 消防署新冠支署

年々救急出動件数が増加しております。緊急性が無く自分で病院に行ける場合は、救急車以外の移動方法で受診してください。傷病者の様子や事故の状況から、急いで病院へ受診したほうが良いと思った時には、迷わず119番通報してください。

火災・救急出動状況			() かつこ内は前年同期	
区 分	火災件数	救急件数		
8 月	1 件 (0 件)	30 件 (26 件)		
2 年 1 ～ 8 月	1 件 (3 件)	169 件 (216 件)		
交 通 事 故 発 生 状 況				() かつこ内は前年同期
区 分	発生件数	死 者	傷 者	
8 月	0 件 (1 件)	0 人 (0 人)	0 人 (1 人)	
2 年 1 ～ 8 月	1 件 (4 件)	0 人 (0 人)	1 人 (4 人)	

人のうごき

(8月末現在)

人口	5,418人	(前月比 + 5人)
男	2,652人	(前月比 - 1人)
女	2,766人	(前月比 + 6人)
世帯	2,755世帯	(前月比 + 5世帯)

町公式ホームページ

町公式フェイスブック

